

昭和前期の流れは敗戦に

藤本 榮子

不穏続きの昭和前期

今年は戦後 60 年の節目として、メディアに特集が多く組まれたし、昨夏から本の出版も多かった。私は昭和の初めに生まれた世代として、自分の体験の窓を少し広げて見直したいとおもうようになった。昭和 60 余年の道のりで、前期（昭元～20）と後期（昭 20～64）の様相は大きく異なる。

私の幼い頃の周辺社会は別として、学校・家庭の場では青春に向けて戦時色が徐々に加わり、暗雲が覆うようになった。大勢は良くわからないまま、2・26 事件（昭 11）日中戦争（昭 12～）太平洋戦争（昭 16～）と周辺に非常時体制が続き、外地戦地での重苦しいニュースも日常化するようになってゆく。昭 18・19 年には＜国民学校児童の集団疎開＞＜学徒出陣・学徒勤労令・女子挺身勤労令＞＜神風特攻隊の実践突撃＞など予想を超える戦時体制が次々と組まれていった。地域では隣組ごと防火用水、火叩き設置等して防空演習訓練が指導された。駅周辺地区の建築物強制取り壊しなどあったが、殆どなすすべもなく、米国の B29 編隊の来襲が相次ぐようになって、昭 20 年春から夏にかけて猛爆を受け、東京や全国各地の街が無惨に消失した。これに加え、米国の沖縄上陸、広島・長崎に原爆投下を迎えて決定的となり、ポツダム宣言受諾、敗戦となる。

昭和 20 年（1945）8 月の敗戦を境に、戦時中の国民の苦闘はなんだったのだろうと思ひもするが、暗雲が切れ、青空が広がる実感があった。昭和史の中の大転換は焼け野原からの再出発となった。配給食糧事情は乏しく、切実なものがあったが、「一億玉砕」に替って「平和」「民主主義」の文字が眩しかった。新しい日本国憲法のもと「明日」のことが考えられるようになったのである。

軍靴の足音から「一億總蹶起」体制の街に

どのように戦争に傾斜していったかを若い世代の人に問われることがある。振り返ってみると、当時はコントロールされた情報しかなかった時代である。昭和 3 年に治安維持法が公布され、伸びかけていた言論の自由は次々と脅かされ弾圧され、戦争に向かう情報が封じられていた。戦後になって初めて明らかにされる情報誌、歴史研究書、語りべによって知る真実が多いのである。戦後になって謎が解けたり、今でも疑問を残す事柄があったりする。

日本の歴史で、昭和 11 年の 2・26 事件は、昭和史の大事なターニングポイントと通説になっている。私は小学 2 年だったが、学校が青山にあり、戒厳令が

敷かれて早退・休校があり、子供心に事件の記憶がその後も尾をひいた。先頃数冊の資料本に当たってみた。当時の日本の状況では、東北地方冷害危機・軍事費増への不満がある一方、国体明徴運動（天皇機関説の葬り）・陸軍内部で派閥対立、幕僚派と皇道派の力関係が複雑さを増し、行き詰まり状態で危機感が強まっていた。テロやクーデターの期待も生まれ、皇道派青年将校たちの動きはここに絡んで陸軍首脳と密着してくる。クーデターを起した青年将校たちの事情・考え方は一様でなかった。——事件研究資料で、彼らの獄中手記や家族への手紙に残るところでは、正義感・エリート志向・政治的野心・領土拡大野心など様々である——が侵略野心では軍閥と共通していた。青年将校たちが下士官・兵士ら 1400 人を率いてクーデターを起こし、政府要人を殺害した半年後、軍事裁判の判決が出て、彼ら 17 名とスケープゴートにされた民間人 2 名が処刑されることでこの事件はピリオドが打たれた。

上官である青年将校の命令により動員された下士官・兵士は別の運命が待っていた。反乱軍に加わったとして罪を問えば、皇軍の根幹に関わるので罪に問わなかった。——下士官の一部は禁固刑——しかし翌昭 12 年夏以降、参加した兵士たちは中国戦線で危険度の高かった長城作戦に動員され、多数の戦死者を出した。2・26 事件の汚名返上とばかりに消耗品のように死んでいったと戦友が回想している。この兵士たちの姿は、一般市民のその後と重なる。この事件のあと、幕僚派が勝ちを制して政治のイニシアティブを握る。次いで日中戦争へと予定の段階筋があった。

その当時国民も 2・26 事件を過去のものとしてしまい、日中事変に眼を奪われてしまうようになる。日本は欧米と対立のまま日中全面戦争に入り（昭 12）、昭和 15 年には南進政策の発表をし、日独伊三国同盟に調印している。

私たちの身边では、昭 16 年春頃より学校の米国人教師の帰国が相次ぎ、不穏が感じられるようになる。12 月 8 日には朝突然、真珠湾奇襲、日米開戦が発表された（1941）。詳しい奇襲の経緯は、これも戦後になって知る一般市民であった。半年ほどは戦勝に沸くニュースが続いたが、昭 17 年夏頃には戦地での日本軍の苦戦・全滅・撤退などが伝えられるようになる。街には「一億総蹶起」のかけ声が巷の標語ともなり、短期決戦の相手国ではなかった。国民若者への動員体制は一段と厳しさを増した。

学業より学徒出陣・女子挺身隊へと

学生への文部省通達では学業は短縮。昭 18 年には首都圏学徒出陣壮行会が行われ、昭 19 年には学徒勤労令・女子挺身勤労令が公布される。女学生の私たち

も短期勤労働員が折々であったが、昭 19 年夏には通年動員となり、軍需工場で戦争協力が第一と切り替えられた。私たちの学校は軍需工場でボールベアリング（軸受）の生産に従事することになった。

2 交替制で一時間の授業という勤務はほどなく 3 交替制となり授業はなくなった。仕事内容としては、材料の切断から順次製造作業・研磨・製品検査まで一環作業を学徒班で受け持つもので、物を造る良い経験ではあった。旋盤機はコンピューターシステムではなく、手動で目を睜りスイッチの切り替えをした。順調に作動すれば、螺旋状のきれいなキリコが流れ出て滑らかな切断面が調子を物語るものであった。錆びさせないような冷却水を注ぎ、機械には油をが当然であるのに、勤めて半年もたたない頃にこれらの必需品が不足の事態となった。材料の材質が落ちてキリコもブツ切れ、表情もがらりと変わり、先の工程が思いやられた。最終工程の友人の話によると、製品の良・不良判定までもが変わってきて、良品判定の目盛り巾が広げられたというのである。製品のゆくえは辿りようがない。大きな工場でのシステムでは生産量のグラフが目立つようになっていたが、見逃せない現実があった。検査班の友人が監督官にいても、もちろん無視された。飛行機事故が多くならなかったか、戦況ニュースが気になった。

戦況悪化で敗戦を迎える

戦況悪化は進み、家ごと防空壕（人の避難には適さず、物の避難に使われた）を掘り、工場内では通路に穴を掘って防空壕とするという空間で作業をしていた。いつも防空頭巾と非常用袋をそばに置く日常であった。空襲警報が鳴って壕に退避命令が出たとき、「この工場に直撃弾が落ちてきたら」「こんどの登校日には」、...と小言で話し合ったひと時を思い出す。

昭 20 年 3 月には東京大空襲で江東区全滅状態、大阪には 4 月から 6 月にかけて 4 度の大空襲、名古屋・神戸など次々大都市が無差別爆撃されるようになる。5 月の東京大空襲では、東京の大半が焼失、焼け野原続きとなった。このとき私も 30 米先まで来た波状絨毯爆撃を目の辺りにした。その夜の空襲は南の空から焼夷弾の音と煙で押し寄せてきた。煙はだんだんたくさんの火の粉を抱え込んで頭上に降り注ぐもので、その分厚さは B29 の機体を隠していた。焼夷弾の落下の音は近いがどこだかわからず、これが防空壕の入り口に落ちたらと壕に入る気にはなれない。そのうち、南側の大きな道路を隔てた向こうの家並みがみるみる燃え上がった。避難が先か、類焼をとめることができるのか道を隔てて迷った。やや間を置いて、流れ弾が斜め向かいの家に落ちたとわかり飛んで

いった。家人は誰もいないで、出窓の所で火が上がっている。姉と二人で渾身、消火に当たった。鎮めてほっと家を出た時、不気味な音に「何!!」と振り向くと、2階の畳が1階の天井諸共落下してメラメラ燃えている。もうこの家は手に負えない。それで隣家への類焼止めに切りかえ、隣家の下見に必死で水かけをし、そこでくい止めた。火の粉で目を真っ赤にして朝を迎え、次の空襲ではきっと隣接の我が家の地域に落とすに違いないと思った。

その後、熟睡できない夜が続き、8月を迎える。広島・長崎に史上大実験の原爆投下があり、御前会議を経てポツダム宣言受諾となる。

戦争の傷は広く深く

私の身近にも戦地で命を落とした長兄、従兄、義兄がおり、復員できた次兄がいる。戦地に赴いた軍人・兵士たちは多くを語らないが、本人や家族に及ぶ傷は長い年月に亘って残るものであることはいうまでもない。命を落とさないで生き延びた私たちにとっても幸せと思いつつ、大事な青春時代のすごし方が随分萎縮した成長期になってしまったと残念に思うことが多い。

また思いがけない経験にも遭遇した。昭14年、日支事変の深刻さがまだあまり伝えられない頃、私の叔父はこの日中戦から脱走してきた兵士に自宅で襲われ、事故死している。何の縁りもない人間にと、長らく叔母たちとともに恨む思いであった。当時の報道は一回小さい記事になっただけで片付けられた。交通事故に遭ったようなものとあきらめるほかなかった。しかし年を経て、私はその兵士を、戦地で神経を病んだ戦争犠牲者だったかも知れないと思うようになっていく。

戦争が激化したころの、戦場にくり広げられた人間模様、沖縄戦場の日本民間人の哀しい物語を聞いたり、現地を訪ねたりすると諦めですまないものがある。原爆投下による地獄絵のような被爆状況は、戦後、絵や映像をみて、手記を読んで、記念館を訪ねて想像してみる。日本には被害経験だけでなく、日中戦争中に加害経験を持つ歴史がある。戦争の大量殺人は市民を撒き込んでも正当化されるものだろうか。

日本は敗戦後立派な日本国憲法を持つように変わったと胸をはりたい。世界的歴史学者のA. トインビーはいつている。日本国憲法に対し、「批判はでてるだろうが、人類共通の遺産として、他の主権国家の模範例となり続けるであろう。もし、第九条が実質的に無視されてしまうなら、人類の不安定な未来に投げかけられた希望の光は消滅してしまうだろう」と。